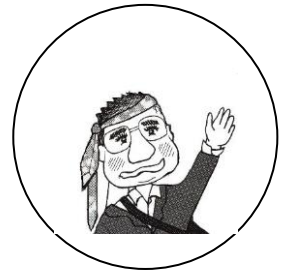


大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「おっさんたちの旅」 鎌倉⑦ 最終章

さて、話を最初の「おっさんたち」にもどそう。

東京湾に沈められたという噂のあったグズ六Bは生存し、それどころか豪邸に住んでいた。わが輩とオメダBを夕食に招いてくれた。学生時代のことはもちろん文学・映画・思想・哲学など話題に事欠かなかった。(わが輩の知的範囲を越えていたが・・・)

話題がグズ六Bの縁者(技術史の研究者)に及んだ時、わが輩は彼らに聞いてみた。

「“技術”とは何か、それを定義すると、どうなる？」

一瞬会話が停止した。とんでもない質問をしたようである。いや、質問の意味が分からなかったようである。そこで、追加質問をした。

「この茶碗を作るのも“技術”、このお箸を作るのも“技術”。さて、この二つの間にある、“技術”とは何か、を説明してみよ」

オメダB、グズ六Bとその妻の箸の動きが止まった。

この質問については前段がある。ある理系名誉教授から論文が送られてきた。それについてコメントをしなさい、とのことであった。論文のテーマは、「技術の概念」であった。理系能力ゼロのわが輩にとって難問であった。そこで恩師哲学者Sの古い著作をひっぱりだしてきて、それを参考にコメントをだした。その著作とは、『近代科学・技術小史』であった。

(この本なら理系教授も知らないだろう)ところが理系教授からコテンパンにやられた。しかも恩師の本を所蔵していた。正直これには驚いた。以来、反撃の機会をうかがっているが、一向に前に進むことができなかった。これは良い機会だと思い、二人の考えを聞いた次第である。結局、何のヒントも得られず、我が敗北はつづいている。

理系教授の言によると、今やコンピューター時代、AIがAIをつくる時代になったので、「機械の時代」は終わったとする唯物論者の意見があるそうだ。理系教授はそれに反論している。確かにコンピューターは、制御、情報処理に長けているが、まだ機械そのものをつくることは出来ない。コンピューターもスマホも機械、人さまが作り出したものである。

今のところ機械は、人さまが関与する「ものづくり」、「技術」で出来ている。この技術とは何かを、物中心主義ではなく、科学と哲学で解明しようとしているところに特異性がある。

わが輩は人さまから分離した「技術」があるなら、それに意味はないと思っている。機械は人さまが造り、人さまのためである。つまり人間が中心なのである。その機械を造る「人

とは何か」がいつも問われている。

「人」といえば、オメダBの人柄、またインドとの関係についても記しておこう。

オメダBとはインドから帰国後に数回会って以来、三十年間ほど会ったことがなかった。しかし同窓会を契機に再び親交を深めることになった。

彼の専門は、ドイツ語とカント哲学である。インドとは全く関係ないように思っていたが、実はヒマラヤ山脈(インド西部)でつながっていた。標高2,050メートルに、ヒンドゥー教文化圏とチベット仏教文化圏との接点にあるマナーリーという町がある。そこから更に標高4,270メートルに「月の湖」がある。(わが輩は月に行ったことはないが・・・)まるで月の表面のような風景が広がっている。誰が名付けたのか言い得て妙である。

インド通でも、なかなか行けない場所である。わが輩も一度しか行ったことがない。そこにオメダBも登っていた。彼の登山部の先輩は、月の湖の高峰にそびえるニーラカクタ(6,558m)に登ろうと、日本で準備登山をしているとき、不慮の事故で亡くなった。その遺志を追悼するために、彼は先輩の妻をともなって月の湖の峠に遺骨を埋葬した。

あまり詳しくは語れないが、それに関して一度だけ「オメダBは、なんていい奴だ」と思ったことがある。もともと彼は面倒見のよい男であった。卒業文集の編集も幹事も、今回の鎌倉詣も率先して引き受けてくれた。まだ若いころの話だが、「ぼくが先輩の家族の面倒をみる」と語った時、わが輩は正直敬服した。

やはり、オメダBはおっさんになってもいい奴だ。彼は国際交流協会のボイランティア活動で、インド青年に日本語を教えている。そのことに触れて、鎌倉の旅の幕を引きたい。

受講生はカーティック君という。彼のルーツは南インドのタミル州だが、家族は北隣のカルナータカ州のバンガロール(現ベンガルール)に住んでいる。バンガロールはかつて精密工業の街であったが、今やIT企業の都市としてインドの先陣を切っている。彼はバンガロールで日本語を学び、妻と来日して日本企業に勤務している。

通常の授業は対面だが、コロナ災禍のせいでオンライン授業になった。

ある日、オメダBからオンライン授業に参加するように連絡があった。オンラインは対面に劣るが、OKの返事をだした。カーティック君の会話能力は会社勤務に支障のないものであった。彼がオメダBの授業を受け続けているのは、どうやら単語を覚えるメリットよりも、コミュニケーションにあるように思えた。オンラインという技術を活用しているが、それは人と人のコミュニケーションの道具に過ぎない。「人」と「人」が主役なのである。

最近問い合わせの電話をすると、AI音声の無機質なコトバが流れてくる。ロボットの音声ガイドに従ってプッシュ・ボタンを押し、やっと知りたいことを得る。ときどき押し間違っ

てイラッ!とする。「地球に人間はいないのか!」と叫びたくなる。間違ってもよい。誤解してもよい。くちゲンカしてもよい。人の声を聞きたいと思わないか。たとえば自動販売機と大ゲンカしても詮無いだろう。せいぜい蹴っ飛ばしておわるだけ。機械の間違いは許せないが、人間の間違いは許せるだろう。それが人間だからである。

鎌倉の旅も、ロボットに案内してもらわなくて良かった。友がいて。